

◇◆慶應義塾大学大学院経営管理研究科(ビジネススクール)
「実践的授業方法について考える」ニュースレター(第17号・2008/5/30)◆◇

ニュースレターの第17号をお送りします。今月から2回にわたって、法政大学ビジネススクールイノベーション・マネジメント研究科で実践的授業に積極的に取り組まれている高田朝子先生の実践的授業取組をお届けします。

コンテンツ

本号のお知らせ
(イベント情報などをご案内します)

実践的授業法取組紹介
(実践教育に鋭意取り組まれている先生方の手記を掲載しています)

ショートエッセー
(実践的授業方法に関するエッセーを掲載しています)

□■□本号のお知らせ.....

今年度の「ケースメソッド教授法」の受講者募集を始めました。詳細は慶應義塾大学ビジネススクールホームページをご覧ください。

↓

<http://www.kbs.keio.ac.jp/program/course.html>

詳しいシラバスはこちら

↓

<http://keio-takagi.jp/lab/course/cmd2008.pdf>

このコースは慶應義塾大学大学院経営管理研究科の修士課程・博士課程併設科目として開講されるもので、ケースメソッドで教えるための講師を育成することを目的としています。この科目には学外の方も参加していただけます。たくさんの方のご参加をお待ちしております。

開講日程、場所、時間は以下の通りです。

9月27日(土)、10月11日(土)、10月25日(土)、11月15日(土)、11月2日(土) 計5回

場 所: 慶應義塾大学大学院経営管理研究科(日吉新校舎)

時 間: 各回とも10時30分～17時まで

.....

慶應義塾大学ビジネススクールのホームページからニュースレターの
バックナンバーがご覧いただけます。
こちらからどうぞ。



http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/gp_news.html



□ ■ □ 実践的授業法取組紹介

実践的授業法取組紹介

このコーナーでは、大学教員による実践的授業方法への先存取組を「私の履歴書」風に紹介してまいります。
今月は、法政大学ビジネススクールイノベーション・マネジメント研究科で実践的授業に積極的に取り組まれている高田朝子先生の実践的授業取組の第1回をお届けします。

～私が考える社会人教育～

法政大学ビジネススクール
イノベーション・マネジメント研究科
准教授 高田朝子先生

【第1回】社会人学生と学者で作る授業

（次回以降の予定）

第2回 難しい授業方法ではあるけれど

私はこの3月まで、高千穂大学経営学部で主に学部の学生を中心に教えていました。4月から縁あって、法政大学ビジネススクール、イノベーション・マネジメント研究科に移りました。「社会人を教えるようになったのだから、授業をする側の心構え授業運営のやり方も変わったでしょう」とこのニュースレターの編集者から声をかけられ、この文章を書くことになりました。今月から2回に渡って、最近の教室で感じていることを綴りたいと思います。

まずは研究科の紹介からはじめます。イノベーション・マネジメント研究科は、専門職大学院として2004年4月に開校しました。「1年で10年の差をつける」という看板を掲げ、時間密度の濃い実践教育を標榜しています。カリキュラムの特徴は、1)1年制を主体として、2)ビジネス・イノベータの育成に焦点を当て、3)プロジェクトによる革新的なビジネス構想力の養成することです。

このため、教員についてはそのほとんど実務家からの転身・転任です。その意味では、私のような研究者教員は少数派です。カリキュラムは普通の大学院で言うところの修士論文に当たるプロジェクト論文の執筆が中心に据えられていますが、教室で学ぶ科目も基礎科目・専門科目・応用科目に分かれ、充実した内容で構成されています。私はこの中の組織に関する基礎科目を教えています。プロジェクト論文というのは、自分が将来起業したいもしくはやってみたいビジネスの企画を煮詰めて論文形式にしたものです。

この研究科で学んでいるのは、社会人経験があって起業を考えている人、企業派遣の人が中心で、それぞれ

がいろいろなニーズを持って学びに来ています。クラスの平均年齢はおそらく30代前半で、学部の学生に比べると、明らかに目がギラギラしています。修学期間が1年しかないので、その時間をどう使いたい、最初からはっきりと意識している学生が多いという印象です。その中で女性は3割くらいを占めていて、「こういうお店をやりたいから来ました」などと男性同様、目的がはっきりしています。

私自身、以前からビジネススクールで非常勤で教えていたり、企業研修やビジネスパーソンを対象とした公開セミナーにも長く出講してきたので、「教える対象が学部の学生相手から急に社会人になって、面食らっている」ということはありません。ただ、学部の学生に対して行う授業と、目がギラギラしている社会人に対して行う授業は、いろんな意味で異なります。例えば授業準備は次のように異なります。

学部で行う授業は基本的に講義ですから、やろうとしている授業を教室で正確に再現するための準備をして、授業に望むこととなります。何年も同じ科目を教えていると、経年的に改善が進み、授業の内容は時間とともに進化して安定してきますが、逆に惰性や慣性で動いてしまう部分も出てきます。しかし、法政ビジネススクールでの私のクラスのように、100%ケースメソッド授業でやるとなると、授業準備は決まりきった授業の再現準備ではなく、教師の頭の中で行う討議シミュレーションが中心になります。

今日扱うケースはこれで、ディスカッション設問がこれ、討議に参加する人はこのメンバーで、参加者のバックグラウンドはこんな、先週までの議論の傾向はこうだった、といういくつかの設定条件から、授業当日はどんな論点で議論が進みそうか、また、私自身はその論点をどのようにハンドルのべきか。授業の直前まで頭の中でシミュレーション映像が回り続けます。

授業を受ける側の社会人学生たちは、授業に出て、そこから持ち帰ってすぐに活用できるものを欲しがります。そのようなニーズに対して、研究者教員である私がどのように応えるのがよいのかということなのですが、彼ら彼女らのニーズに迎合し過ぎても、結局、社会人学生のためにはならないと考えています。だから、学者として蓄えてきたことを全部教えることで今後のキャリアに役立ててもらおう。これが私の役割なのだと思います。

ただ、社会人に理論を講義しても受け入れてもらえません。それよりも彼ら彼女らは自分で話したいし、教師に聞いてもらいたい、教師のコメントが欲しいのです。そのときにケースメソッドという授業方法（というよりコミュニケーションの方法）はきわめて自然で無理がないのです。このコミュニケーションパッケージの中で、社会人学生は主役になり、学者も貢献するというのが理想型だと考えています。

しかし、みんなが自由に話すというのは危険も伴う営みです。今回はそんな危険防止策についても触れたいと思います。

.....□■□

□■□実践的授業方法ショートエッセー.....

このコーナーでは、実践的授業法取組で紹介した内容を、ショートエッセイ形式で解説しています。

第16回

「カエルの子はカエル」を乗り越える

このニューズレターで毎回、「実践教育」を話題にしている。しかし、「実践教育」を考える際に、私たちはあることを忘れがちになる。それは、「実践教育」の現場で教えている教員の多くは、「実践教育」なるものを、自分では受けたことがないということである。

つまり、「実践教育」を掲げる専門職大学院教育の現場で、教員たちは未経験の教育領域にチャレンジしている。これを大げさな解釈と取るか、謙虚な解釈と取るか、意見は分かれるだろうが、今月の筆者のエッセイはここから始めたい。

一般に、「カエルの子はカエル」である。例えば、研究者の養成場面を考えてみよう。研究者養成の訓練を受けて独り立ちした研究者が、やがて指導的立場に立つようになり、研究者の卵を育てていく。ビジネスリーダーの育成場面も同様で、企業に入社し、そこでたたき上げられた幹部や役員が、自分の後釜にしたい人材を見極め、教え込むことで進んでいく。

このどちらの場合にも、先輩が後輩に自分の追体験をさせることを通して、人材は再生産されていく。人材の再生産が自ずと進む環境を「伝統的環境」と呼ぶならば、専門職大学院は、そのように呼ぶにはまだ日が浅すぎる。実践教育の現場には、追体験すべき教員の手本が少ないのである。

法政大学ビジネススクールをはじめ、多くのビジネススクールで、ファカルティに名を連ねているのは研究者教員と実務家教員のいずれかである。研究者教員はこれまでに積み上げてきた研究業績を元手として、また、実務家教員はこれまでのビジネス業績を元手として、実務家への教育を試みている。ただ、それを「教室での授業によって」という制約下で行うとなると、もうしばらくの間は、どちらの教員も、自分の元手を生かしてどのように実践教育を行うかを、模索しなければならないのかもしれない。

高田先生の文章からも、そんな模索の足跡が感じられた。学者としての自覚と誇り、そして、1年間で学習成果を実務に確実に役立てたい社会人学生のニーズへの理解。なかなか相容れにくいふたつの要素を、高田先生は授業方法を工夫し、それを媒体として折り合わせていこうとしている。高田先生にとって、ケースメソッドは、自らのアカデミックキャリアをビジネススクールの教壇で生かすための重要なツールなのだろう。筆者にはそう思えた。

筆者らはケースメソッド授業を普及・啓発する立場にはいるが、必ずしもケースメソッド授業だけが最善の方法だとは思っていない。本質的な問題意識は、その教員が積み重ねてきた、その教員ならではの教育資源を、「実践教育」という営みに結実させるために、どのように加工・変換して、教育行為化するかである。その方法論とあり方は、実践教育に関わるすべての教員が探求すべきだと、筆者は考えている。

高田先生の場合、学部教育からビジネススクール教育に舞台を変えたのはこの春だが、これまでも慶應ビジネススクールで専門科目を担当し、社会人セミナーにも多数出講している。だから、ご本人自身、それほど大きな変化は自覚していないのかもしれない。ただ、それでも、「学者として実践教育にいかに関与すべきか」という問いは明確に立て直した形跡がある。筆者らは高田先生へのインタビューの時間中、ずっとそれを感じていた。

新しいミレニアムを迎えてから開校された多くの専門職大学院の教員が、代替わりを重ねて第3世代くらいになっているであろう2030年から2040年ごろ、実践教育を担う教員はどのようなバックグラウンドを持って教壇に立っているのだろうか。今日のように研究者教員と実務家教員の混成のままか。あるいは、その中間的な教員カテゴリーが確立されていて、そのカテゴリー内で教師の再生産が進んでいるのか。たいへんに興味深い。

専門職大学院がそうであったように、これから先も、新たな教育ニーズが次々に顕在化して、新しい枠組みの教育機関がいくつも誕生していきだろう。その都度、とりわけ開校期に教壇に立つ教員は、「自分が教わってきたようには教えられない」という課題に直面する。そんな場面での高等教育対応力において、我が国の大学は他国に誇れるようでありたい。

（文章 竹内伸一）

.....□■□

このメールマガジンは毎月1回発信しております。

.....

○お問い合わせ先

慶應義塾大学大学院経営管理研究科
ケースメソッド授業法研究普及室（高木晴夫研究室内）
kbsnewsletter@info.keio.ac.jp

○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/>

○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科 文科省特色GP事業ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/index.html>

.....

発行者 高木晴夫

編集者 竹内伸一、住吉みどり、河井純子

次号（第18号）は2008/6/30にお届けする予定です。

ご意見、ご感想、購読者のご紹介は kbsnewsletter@info.keio.ac.jp 宛に、また、メール送信先の変更を希望される方、購読を希望されない方、購読を中止したい方は、お手数ですが kbsnewsletter@info.keio.ac.jp までご一報ください。次号発信日の前日までのご連絡に対応させていただきます。

当メールマガジンの内容を転載する場合は、ご一報ください。